

## ガルブレイスと中屋、小原両先生

第2期（1954年卒業）小松 健男

バンブルビーは現在の流体力学では飛べない構造である。にも拘わらず現実には大気中を堂々と飛翔している。この現実を見れば、流体力学の理論を変えなければならない。

資本主義終焉の主張もこれと同様だ。現実のアメリカ経済は順調に発展している。此れを理解するためには新しい理論が求められる。1952年（昭和27年）ガルブレイスはこのような序文で“American Capitalism”を刊行した。

これを日本に紹介したのが一橋大学の小原敬士教授であった。この本を読んで、小原先生に直接指導を受けたいと中屋先生に相談したところ、その日のうちに教養学科長の木村健康先生を通じて、駒場に小原先生が来て下さることになった。その上、逗子のお宅にも伺って、お教をうけることも出来た。

卒論は迷う事無く、ガルブレイスと決め、彼が1931年23歳の時、発表した処女作“Theory of Monopoly”を探し求めたが、日本には皆無だった。米国滞在中の中屋先生に相談の手紙を出したところ、一ヶ月ほどして、先生から分厚い小包が届けられた。なんと米国にもないので、議会図書館に頼んでコピーを作ってもらったのだ。当時はコピー機は出来ていない。全ページを写真に撮り、そのネガを送ってもらったのだ。箱の中に電球をいれ、磨りガラス越しにネガの論文を読み、卒論を仕上げた。

その卒論を持って逗子の小原先生のお宅に伺った日に、私の父が脳溢血で倒れた。仕送りが難しくなったから、学校には残らず、就職口を探すようにとの連絡が入った。

家庭教師をしている先のすすめで住友銀行を受けることにしたところ、中屋先生から、学友の伊部恭之介（当事 東京事務所長・後の頭取）を紹介するから訪ねるようにと勧められた。また小原先生からは、学友の佐々木真（当事ニューヨーク支店長・後にサントリー副社長）に手紙を出しておくから、自信をもって入社試験を受けるようにと励まされた。

銀行に入ってから、このように立派な先生の期待に反しては成らないと、がむしゃらに勉強した。行動指針の原点は、常にガルブレイスの考え方を尊重する事であった。

すなわち 現実直視と既成概念にとらわれない柔軟な発想をする事であった。歴史の古い大企業の場合、長年積み重ねられてきた因習も多く、現実と遊離

したルールが数多く残されている。これば事業発展の阻害要因と成っているにも拘わらず、保守派が多く、改善した場合のマイナス部分を怖れる気風が根強い。いわゆる大企業病である。

今では当たり前のATM(現金自動受払機)の開発を提案した時、当初賛成は皆無であった。銀行内だけではない。機械業界も受けつけてくれなかった。日本電気、横河電機、北辰電機等々、日本を代表する大企業は全く相手にしてくれなかった。困り切っている時、若手の業務部員が、発足間もないオムロンの若い技術者を連れてきた。試作費用を500万円負担してくれれば、挑戦しても良いとの申し出であった。銀行内部を説得して許可を取り、発注したところ、暫くして1万回に1回ほど紙幣が1枚余計に出てしまうので、10万ずつ封筒に入れてほしいとの申し出があった。入金の場合はお客が確認するので心配が無いが、出金の場合、新札が多いと、2枚重ねて数えてしまう危険があると主張する。封筒入れの費用を考えると、1万回に1回銀行が損をするだけで済むのであれば、目をつぶっても良いから完成させてほしいとお願いした。

スマートフォンやiPadも同様である。技術的には既存技術の応用に過ぎない。パソコンと携帯電話の一体化は多くの利用者が夢見ていたことである。しかし日本の経営者や技術者は完璧な製品を求めすぎたため商品化に踏み出せず、アップルやサムソンに蹂躪される結果になってしまった。

フリードマンに代表される古典経済学者のなかには、ガルブレイス経済学の数学的モデリングを忌避し、平易な記述の政治経済学を思考したと非難する人が居るが、現実から遊離した論拠はすでに経済学ではない。

卒業後60年間、多くの経済活動に銀行員として接してきた私にとって、ガルブレイスの所論は最高の指針であった。他の分野はともかく、少なくとも経済学およびその周辺にかかわるものは、謙虚に彼の主張に耳を傾けるべきではないかと思う。

今は亡き中屋、小原両先生の御霊に深甚の感謝を捧げると共に、本日が奇しくもガルブレイスの没後7年の命日に当たる因縁を感じながら、擱筆する。